



(いま、なお、有田節は衰えず)

権は行使できない」としてきたものを、一転、「行使できる」と閣議決定。

日本を海外で戦争する国に変えてしまった。15年夏は、「安保法制Ⅱ戦争法」に反対する暑い夏になった。わたしも、介護の合間を縫うように杖をつきながらマイクを握った。

ところが、9月末からの済生会病院通いが杖離れの契機になった。

「杖は、もうすこし先でもいいかな」。

と、自信をえたからだ。毎日4階の病室まで、エレベーターを使わないで階段を歩いて上り下りした。正面玄関から4階病室までは往復134段。それを、一日に4〜5回は往復した。医学的には、エレベーターを使わないで階段を利用すると身体活動量は7倍に上昇する。

そういえば、なんだか少し体が軽くなったようにも思える。

転ばぬ先の杖は、大事な生活の知恵だ。が、一面では、他力本願の甘え

におちいり易い面もある。だから、できるだけ、エレベーターやエスカレーターは使わない。自分の足を使うことだ。

済生会病院での40日間は思わぬ副産物を与えてくれた。とはいえ、老化は自然現象。杖離れがいつまでつづくか、それは曰く言いがたしである。

6、尊厳死の宣言

人間は、食べたり飲んだりできなくなると生きていけない。

飲食ができなくなれば、寿命が過ぎたのだから、あとは、自然に死の道を選ぶというの是一般論としては、至極、正当に思える。

70歳も後半を過ぎると、多くの友人が逝くようになってきた。概して大酒飲みと煙草吸いがはやい。

10人いれば10通りの生と死があった。

わたし達も、延命措置で苦しまないで安らかに眠りたいー人間らしく死んでいきたい、と、いろいろと話し合ってきた。いわゆる、尊厳死願望である。80の坂を越えてから、いよいよ切実性を帯びてきた。そして、発病の年の4月に、つぎのような文書に署名、捺印している。